

大阪養老院の機関誌『養老新報』についての考察Ⅱ

寅垣内 す が

京都福祉専門学校

A Study on the Bulletin of Asylum-Osaka, YOUROU-SINPOU No. 2

Suga Toragaito

Kyoto Fukushi College

本研究においては、1902（明治35）年に創設された、100年以上の歴史を持つ、現大阪老人ホームの明治時代に発行された機関誌、『養老新報』の分析を行うことが目的である。前稿Ⅰでは、大阪養老院の初代施設長、岩田民次郎が『養老新報』を発行するまでの背景や歴史、『養老新報』の概要について述べた。本稿では『養老新報』から窺うことのできる創設者岩田民次郎の福祉観や大阪養老院を支えた人々に焦点を当てて、『養老新報』を読み解くことの意義について考察する。

キーワード：明治創立の大阪養老院、機関誌『養老新報』、岩田民次郎の福祉観、大阪養老院を支えた人々

1. はじめに

1902（明治35）年に大阪養老院を設立した岩田民次郎施設長は、社会福祉に関する理解が国にも一般の人々にも乏しかった時代に、私財を投げ打ってまで施設を創立し、苦難の中で利用者のために施設を維持し続けた。明治時代の創立から数えて、110年にあたる来年度、2012（平成24）年には社会福祉法人聖徳会は110周年を迎えるのである。そして、現在も100年以上の歴史を持つ社会福祉法人として、存続し続けている。社会福祉法人聖徳会は、創設者岩田民次郎の福祉観を受け継ぎ、発展させながら時代とともに変わる多様な高齢者ニーズや高齢者福祉施策などを適切に対応し、個別性を重視した介護サービスの提供を目指しているのである¹⁾。特別養護老人ホームのみならず、あおぞら保育園や介護付き有料老人ホーム田坐の家などを開設し、歴史ある法人として、発展し続けているのである。大阪養老院の設立当初の苦難の歴史をそのまま読み取ることが出来るのが、社会福祉法人聖徳会の大阪老人ホーム5階資料室に保存されている機関誌の『養老新報』である。『養老新報』には、養老院での入所者の生活、入退所状況と共に決算の報告や寄付一覧、事業内容等々が記載されている。初代施設長の岩田民次郎の福祉観や民次郎を支えた家族、支援者の姿がその機関誌を読み解くなかで、生き生きと写し出さ

寅垣内 す が 〒611-0042 京都府宇治市小倉町春日森25番地 京都福祉専門学校

れているのである。当時の養老施設の様子を機関誌から推察し、その解析した内容を総合し、蓄積した結果をこれからの講義の中で活かし、学生たちに先人の遺した偉業として伝達していくことが最終目標である。2010（平成22）年に発表した論文では、大阪養老院で初代施設長の岩田民次郎氏が『養老新報』が発行するまでの背景や歴史、『養老新報』の概要を紹介したのみで終了した。

本稿では『養老新報』から窺うことのできる創設者岩田民次郎の福祉観や大阪養老院を支えた人々に焦点を当てて、分析を行った。今後更に研究を深めることが出来るように務めたい。

2. 岩田民次郎の福祉観について

現在の社会福祉法人聖徳会における長い歴史を構築する基礎となった、岩田民次郎の福祉観について、民次郎の歩んできた足跡や『養老新報』に記載されている記事を参照し考察する。

民次郎の出身地は愛知県葉栗郡前野村であるが、実際の生地は岐阜市であった。民次郎は1869（明治2）年の2月に母の実家で生まれ、その地で育ったのである。民次郎の祖先は造り酒屋を生業としており、大飢饉の際には米蔵を開いて近郊の飢えた人々を救済した。祖父勇八は、「仏の勇八」と村人から呼ばれるほど信仰心が厚い慈善家であり、手厚い施しを行ったが、家業は傾き、ついには酒造業を人手に渡す結果になってしまったのである。家業を失った、民次郎の両親は岐阜に移住し、酒の小売り業に転じた。このように後世に受け継がれる功績を残した民次郎の生き方や福祉観は、祖先から受け継ぎ構築したものであると推察できる。

民次郎は、子どもの頃から、家業を手伝い、小学校も満足に通えなかったようであるが、町内にあった横山静雄の私塾に通い、勉学に励んだ。仕事と夜学の両立という厳しい努力と優れた恩師との出会いが、その後の民次郎の人生の基礎となった。17歳で故郷を離れ、名古屋の木材商を営んでいる叔父の元で働いた後、東京から横浜まで仕事を探して移動し、横浜の商店で勤務するが、脚気という病を得て一時療養のために帰郷する。故郷での療養後、神戸の貿易商に勤務する。その後、大崎組商会という、大商店に採用され、認められて番頭になるが、独立を夢見て、雑貨店を大阪の心斎橋筋に開店した。きぬと結婚した翌年に、故郷に濃尾大地震が起こり、全国から莫大な義捐金が寄せられた。この際の人々の厚意に、民次郎は触発され、養老事業を始めようとする切掛けとなったのである。しかし、大阪養老院創設は、十年以上も先のことであり、それまでに民次郎は、苦難の数々を乗り越えなければならなかったのである。濃尾震災後、民次郎は大きな仕事に挑戦してみたいという希望を胸に妻と北海道に旅立った。1891（明治24）年札幌で雑貨小売店を開店させたが、市の中心部から出た大火で全財産を失ったのである。その後、北海道では不運続きで、せっかく始めた小樽での貿易の仕事も嵐で船が難破し、全てを失い、漂着した場所から、妻と共に北海道を当てもなく放浪したこともあった。北海道で再起することは叶わず、終には失意の中で大阪に帰ることになってしまった。勝手な推測であるが、民次郎は大阪養老院創設の折に大阪府の担当者に「大阪で養老事業を始めると多くの高齢者が殺到してその処置に困る」などと、反対された時も決して諦めず、周囲の人々の知恵と力を借りつつ、難局を乗り越え、創立を果たしたことや、1927（昭和2）年に泥酔した利用者による放火で施設が全焼した後も、世間

の厳しい批判のなかで、施設運営を挫けることなく続け、再興を図った民次郎の底力は、この頃培われたのだらうと思うのである（図1）。



図1 1927（昭和2）年2月12日大阪養老院全焼
飲酒した利用者の放火により全焼

民次郎が起死回生を図るために大阪に帰り、始めたのはうどん屋であったが、大繁盛し、蓄えたお金で土地も購入し、資産を増やし、念願の養老事業の道へとまい進することになるのである。

1903（明治36）年発行の『養老新報』の記念すべき第1号から第2号には「大阪養老院設立趣意書」と大阪府に大阪養老院の設立を申請した際、提出した「大阪養老院概説」及び「大阪養老院収容に関する規定」を掲載している。特に「大阪養老院設立趣意書」の紙面上の公開には重要な意味を持つ。「大阪養老院設立趣意書」において、民次郎は「老ヲ憐ミ幼ヲ扶クハ人道ノ常徑ニシテ」と述べ、「世間隣ムベキモノ尚頗ル多シ」とし、高齢になって、食べるものもなく、親戚や古くからの知り合いはもとより、孝養すべき子と孫もなく、空しく飢えと寒さに苦しんで呻く人々が存在することを挙げた。そして「身ノ不幸ヲ悲痛シ、其迫ルヤ遂ニ河水ニ投シ鐵路ニ轢レ、以テ天命ヲ縮ムルモノ程隣レナルハナシ」と悲嘆にくれたのである。そして「以テ彼等不幸ノ徒ヲ収容シ、彼等ガ児孫ニ代リ彼等ガ親戚トナリテ、之ヲ救済扶養シ、彼等ヲシテ悠々自適長ニ天命ヲ全フセシメント欲ス」と述べた。創設当時（図2）は養老院の存在自体が広く世の中に認められているとはいいがたく、設立に当たって、その設立の目的意識、使命を明確にし、訴えていく必要性があったのである。「大阪養老院設立趣意書」には、民次郎の養老事業に対する熱い思いや福祉観が表現され、その精神が今日まで脈々と続く社会福祉法人聖

徳会に受け継がれている。そして、その文言の一言一句に民次郎の大阪養老院の開設に至るまでの苦悶苦闘した努力の日々を窺うことができるのである。



図2 1903（明治36）年大阪養老院創立4ヶ月の入所者たち
（上段右が岩田民次郎施設長、右端は岩田きぬ夫人）

3. 大阪養老院を支えた人々

大阪養老院の創立に至るまでの数々のハードルを超え、己の道を歩いてきた民次郎であったが、その道のりには、様々な出会いと民次郎を支える人たちが存在した。

1902（明治35）年の春の肌寒い日であった。足元や動作がしっかりしていない、よぼよぼした高齢者が重い荷物を担いで、民次郎の元に磨き砂粉を売りにきたが、その寄る辺なき高齢者の身の上話を聞いて、民次郎は同情し、多くの幸薄い高齢者の救済のためにと養老事業への志を固めたのであった。さらに秋には、以前、大崎組商会で懇意になった、取引先の若主人が亡くなる前に養老事業を志す民次郎のために、土地を寄贈してくれたのであった。溯ること8年前に、若主人が偶然に民次郎のうどん屋に来店し、それが縁になり、相当な出資金も用意して、熱心に転職を勧めてくれた。しかし、民次郎はそれを感謝しながらも固辞した。若主人と再会を約束して、別れたが、その出資金で若主人が土地を購入し、養老院創設の一助にと病気で亡くなる前に、若主人の名前を伏せることを条件に贈与してくれたのである。現代でも、大災害勃発の際などに、名前を伏せることを条件に被災地に義捐金を贈った人々の存在を耳にするが、明治時代にも、若主人のような奇特定の人物が存在したのである。そして創設後も養老院

は公的な手厚い支援もない、苦しい状況であったが、さまざまな人々が民次郎の志に感銘を受け、大阪養老院を支援したのである^{2), 3)}。

1907（明治40）年10月15日発行の『養老新報』第54号には「奇特なる僧侶」という記事がある。東区上本町7丁目の僧侶北岡英静は、慈悲忍辱を旨とする仏教徒であると紹介され、道を歩きながら、道に遺棄されている古釘、古金、紐の切れ端などを手当たり次第拾い、収集し、量が溜まってくると屑屋に売り、その代金を大阪養老院に寄付してくれたのであった。明治時代にも不用品、廃物を再利用したりサイクルを上手く活用し、寄付する人物が存在したのである。また、寄付金だけでなく、専門技術を活用して、施設に貢献した接骨医の記述もある。南区難波、伊吹堂の年梅秀三郎という、接骨の名手として有名な接骨医が骨を打ち挫いた児童を引き取って、治療してくれたということである。さらに南区戎橋相生町角の高橋眼病院の院長は、大阪養老院に多大な支援を行っており、児童2人が悪性の眼疾患に悩んでいる時も治療、投薬し、2ヶ月かけて全癒させてくれたなどの記述が見られる。

『養老新報』に児童の記述が見受けられる理由は、1905（明治38）年に東北三県の凶作が起こり、民次郎が現地に駆けつけ、路頭に迷った高齢者や児童を救出し、大阪養老院に保護したからである。民次郎は児童の為に、教師や看護師も採用し、教育も施し、万全を期して、手厚く処遇したのである。その状況についても『養老新報』で紹介されている。入所者が増加することは、厳しかった施設の経済状況をさらに圧迫することになったが、民次郎は多くの人々に支えられ、乗り越えていったのである。民次郎の福祉観やその志に触発され、その心意気に共鳴する人が存在し、それは『養老新報』のさまざまな記事から知ることができるのである。

4. おわりに

1907（明治40）年12月15日に発行された『養老新報』の第55号には、故郷の岐阜県の『美濃新聞』の記事が採り上げられている。それは、『美濃新聞』の主幹木村竹塙が岐阜県出身の名士を訪問し、会談した内容を記事にしたものである。木村は、民次郎と尼ヶ崎紡績会社の支配人、田代重右衛門とのそれぞれの業績に触れ、二人は岐阜県の誇りであると紹介している。故郷の誉れとされ、故郷の新聞に掲載される程、大成した民次郎であった⁴⁾。2011（平成23）年3月に東日本大震災が起こり、9月13日付の『朝日新聞』朝刊によると、死亡者15783人で行方不明者は4086人と掲載されている。大震災によって親を亡くした子どもや原発事故と放射能の不安で子どもの将来の健康問題についても、連日報道されている。1905（明治38）年に東北三県の凶作で飢饉が起こり、全国的に新聞で報道されるやいなや、素早く行動を起こし、高齢者や子どもたちを大阪養老院に連れ帰った民次郎の業績を思い起こす。

氣に染まなければ、実の子どもさえも虐待し、手にかけてしまう、世知がない昨今の状況において、民次郎のような私財を投げ打ってまでも、人の為に尽くす、そして、そんな民次郎を支える心優しき人々の存在こそが、忘れてはならないものであろう。社会福祉法人聖徳会の創立100年の折に作成されたビデオの最後に「目の前に困っている人がいた。このことに目を背けることができなかった。」というメッセージが紹介されている。創始者から、社会福祉法人聖徳会を託された、岩田克夫会長によれば、この

言葉は、養老事業を始められた先人の方々から、折にふれ、よく聞いた言葉であったという。岩田会長は、先人たちの辿った歩みから、歴史を振り返り、施設設立の動機や運営の精神から原点を学び、さらに、その中から次の時代に向けてのキーワードを探ることの重要性について言及する⁵⁾。つまり、社会福祉法聖徳会の岩田民次郎の福祉観と共に「目の前に困っている人がいた。このことに目を背けることができなかった。」という言葉の精神は、社会福祉法人聖徳会に流れている施設理念の根底となっているのである。さらに、その言葉とともに『養老新報』を読み解くことによって、社会福祉に携わる人々にとって必要な、原点に立ち返ることの大切さを学ぶことができるのである。

謝辞

貴重な写真の掲載許可を頂き、また論文化にあたり、暖かい励ましを頂いた社会福祉法人聖徳会大阪老人ホーム岩田克夫会長に心から感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 社会福祉法人聖徳会（2011）インターネットホームページ．高齢者総合ケアセンターまつばら．
- 2) 泉道夫（1982）道ひとすじ 大阪老人ホーム二代の足跡．36-60．社会福祉法人聖徳会．
- 3) 創立100周年事業実行委員会（2000）道ひとすじ 大阪老人ホーム100フォトグラフィティ．17-91．社会福祉法人聖徳会．
- 4) 小笠原祐次（1992）老人問題研究基本文献集 24巻．養老新報．第1号-55号．大空社．
- 5) 岩田克夫会長より聞き取り調査．2011年9月2日．